

# 令和元年度 福祉体験作文

コンクール

作文集



©しゃらんちゃん

Y 弥富市社会福祉協議会

## ごあいさつ

このたび、弥富市社会福祉協議会として四回目の実施となる福祉体験作文コンクールに、市内各校より多数の福祉体験作文をお寄せいただき、誠にありがとうございました。優秀作文を作文集としてまとめさせていただきましたので、お手に取つてご覧いただけると幸いに存じます。

さて、今回も日常生活や福祉体験を通して感じた福祉のことについて書いていただきました。家庭・地域・学校などで学んだことや体験したこと、自ら工夫して見聞きしたこと、思いやりや助け合い、やさしい気持ちやあたたかい気持ちになつたことなどを丁寧に自身のこととして書かれていました。

また、社会のあり方や暮らしやすい地域づくりなど共生社会の考え方に基づく視点や他者と接する時の視点、つながりの大切さ、将来への目標や希望が書かれているように感じられました。温かい心の通いが福祉の原点であるということが、表現こそ違えど共通して書かれていました。

来年には東京オリンピック・パラリンピックが開催されるため、多種多様な人が日本に訪れ、必然的に福

祉を必要とする人も多くなります。そんな多様化の時代、社会の変化や時代の流れにより、福祉ニーズも変化してまいりますが、今回の作文への取り組みが、福祉について考えるきっかけとなり、今後、福祉を必要とする人たちに思いやりとやさしさをもつて接してくれる児童・生徒が一人でも多く増えることを願つております。

本会といたしましても、「地域共生社会」の実現に向け、ボランティア体験などの経験の場を増やして、児童・生徒の気づきや思いやりの心を育ててまいりたいと思います。

そして、この作品集が皆様の目に留まることで、相手を思いやり、たすけあい、支えようとする気持ちが社会全体に広がっていくことを望みます。

結びに、作品を応募いただいた児童・生徒の皆さん、指導にあたられた先生方、ご家族の皆さんに深甚なる敬意と感謝を申し上げます。

令和元年十二月

社会福祉法人弥富市社会福祉協議会  
会長 八木輝美

# 令和元年度「福祉体験作文コンクール」作文集

・最優秀賞	辛いなかにある幸せ	弥富北中学校一年長田晶奈
・優秀賞	もう一つの言語「手話」	弥富中学校二年珠島瞳
・秀逸	私が学んだこと	栄南小学校六年山岸朱璃
・秀逸	車イス体験	日の出小学校四年森智哉
・入選	誰でもできる福祉という人助け	十四山東部小学校三年真野りさ子
・入選	生き生きとくらせる社会	十四山東部小学校六年伊藤桃百風
・入選	相手の立場に立つことの大切さ	弥生小学校五年小林諭都緑
・入選	思いやりのある未来	白鳥小学校四年日比夏海
・佳作	町をきれいにする活動	十四山中学校二年荒木菜々美
・佳作	これから日本のために：	弥富北中学校一年大羽美憂
・佳作	見守る力と笑顔の福祉体験	白鳥小学校六年稻垣呼音
・佳作	福祉ってどういう意味？	桜小学校四年浅田冬真

# ★最優秀賞★

辛いなかにある幸せ

弥富北中学校 一年 長田 晶奈

永久の闇とはどんなものだろうか。それは、私が目を閉じたところで分かるものではないと思う。なぜなら、目を開けばそこには色の世界が広がっているのだから。

私はこの作文を書くにあたって、全盲でありながら職員として働いている、Iさんについて調べてみた。彼女は一歳三ヶ月の頃に全盲になり、高校までは盲学校に通っていたそうだ。今は都内で一人暮らしをしている彼女は、日々の外出、通勤、身の回りの家事などは基本的に自分で行っているそうだ。私は、彼女の記事を読みながら、自然と目を閉じていた。「凄い。こんなにも大変なんだ。」そんなこと、誰にでも分かるかもしれない。だが、目の見える人が実際に目を閉じてみても、本当の大変さは分からぬだろう。目を開ければ必ず、色のあるあたりまえの世界なのだから。

では、私達がIさんのような、目の不自由な人達のために出来る事とは、どんなことなのだろうか。これは私が体験した事だ。あるお店の前で一人の女性が座っていて、手には白い杖を持っていた。お店を出ようとした時、あの女性が座っていた。私は、少し

気になつたので、母に尋ねた。「ずっと座っているけど大丈夫かな。」そしたら母は、その女性の元へ行き、「大丈夫ですか。手を貸しましょうか。」と言つた。するとその女性は驚いたように、「本当にいいのですか。」「全然大丈夫ですよ。今日はここまで歩いて来たのですか。」「はい。ですが帰り方を忘れてしまつて。あなたが来てくれて、本当に助かりました。ありがとうございます。」そう笑顔で会話する母と女性を見ていたら、今までなんだか笑顔になれた。どうやら、その女性は、Iさんと同じ全盲だったそうだ。母の携帯電話で家族の方に電話し、迎えに来てもらつた。無事帰ることが出来た。その帰りに母が言つた言葉を今でも覚えている。「話かけてよかつた。」そう笑顔で言つた母を見て、こんな人になりたいと思つた。

今回、この作文を書くと決まった時に、福祉とは何かと考えた。その時に、あの女性と母の笑顔を思い出した。

他にも目の見えない人に何か出来ることはないだろうか。こんなにも福祉について考えたのはいつぶりだろうか。

小学五年生の時、目の不自由な人達の生活などについて、たくさん調べた事がある。その時にとっても気になる記事があつた。そこには『目の不自由な人達も出来るバレー・ボール』と書いてあつた。そのバレー・ボールについて、たくさん調べた。なぜかというと、私は、

バレー ボールを小学一年生から習つていて好きだからだ。という理由もあるが、単純に目を閉じた状態でバレーボールをするのは、とても難しいのではないかと思つたからだ。だが、ルールはいたつてシンプルで、やつてみたら、とても楽しかった。普通のバレー ボールとは少し違うけど、チームで協力することや、コートの中に笑顔がずっとあふれていることは変わらなかつた。誰がこんなに素晴らしいものを考えたのだろう。多分、目の不自由な人達にも、私達と同じような『楽しい』という感覚を味わつてほしいと考えたのだろう。そういう、人を喜ばせようという気持ちや、目や耳が不自由な人達だからという理由で、差別などをしない人を、とてもカッコイイと思うし、凄いと思う。私も、人より優れているとか、頭がいいとか、そういう理由でこの人はダメとか、この人しか来てはダメなどと決めつけるのは絶対にしたくないと思う。

福祉だけではなく、普段の学校生活や地域で行われる行事など、色々な人と出会う場面で、周りを見て、友達や人を大切にしていきたいと思う。

この福祉体験作文を書きながら、私は考えてみた。目の不自由な人達にとつての幸せとは何なのか。逆に、目の不自由なことに幸せなど無いのかも知れない。調べてみたところ、最初に紹介したIさんは、電車で席を空けてくれる方がいても、席がどこか分からなくて困るそうだ。他にも、人身事故で電車が止まつたりし

た時、いつもとは違う事が起きた時には、声をかけてほしいそうだ。それは、声をかけられるのが苦手な人もいるとは思う。だが、そんな理由で無視しておくことは出来ない。どうせなら、嫌と思われてもいい。人助けをしていきたい。

いつ何が起こるか分からぬこの世界。だからこそ、お互いに認め合い、学び合う事がとても大切なのだと私は思う。



# ★優秀賞

## もう一つの言語「手話」

弥富中学校 二年 珠島 瞳

皆さんには「障害」と聞いて、どのようなことを思い浮かべますか。大変そう、怖い、普通の人とは違うなど、さまざまな考えがあると思います。私自身も、不便そう、かわいそう、自分に障害があつたら嫌だ、などと考えていました。

私は学校で行つた福祉実践教室で、「手話」について学びました。この教室を通じて聴覚障害者の生活や悩みを知ることができました。アラームが聴こえなかつたり、地震等の災害時の際、緊急放送に気付かなかつたりと、健常者には分からぬ悩みがたくさんあることを知りました。その時私は、自分たちにできることは何だろうかと考えました。

障害のある人たちが、安心して楽しく暮らすことができる社会を実現するには、すべての人が「障害」について正しく理解し、障害のある人を皆で支え合うことが大切だとということを知りました。

ですが、障害のある人たちは、特別扱いされることを必ずしも望んではいないというのもまた事実です。

障害はあるけれど、皆同じ社会で暮らす人間です。「障害者だから」という理由で、自分の力でできるこ

とさえもできないと思われたり、望んでいないのに助けられたりすることで、だんだんできることがなくなってしまうかもしれません。そんな状況になつた時、私だったら「嫌だな」「生きづらいな」と考えて、気持ちが沈んでしまいそうです。

だからといって、障害のある人を健常者と同じと考えるのも違うと思います。どこからは助けて、どこまでは見守るという境目を判断するのは、私たち健常者には難しいかもしれません。分からぬ時は、助けが必要かどうかを障害のある人に尋ねればいいのです。私はそんなふうにして障害のある人を助けたり、見守つたりしていきたいと思っています。

残念なことに、障害のある人への偏見は今もなお存在します。そんな社会をつくつてしまつたのは、他の誰でもない私たちです。そして、そんな社会を変えていけるのも、他の誰でもない、私たちだと考えます。私のいとこに、聴覚障害のある人がいます。普段は離れた所に住んでいて、年に数回会う程度ですが、今年の春から夏にかけての三ヶ月ほど、うちで一緒に生活する機会がありました。

いとこは耳が聞こえないので、言葉を話すことができません。最初の頃は紙などに書いてコミュニケーションをとる「筆談」を用いて話していました。今は小学校の頃に習つた「指文字」と、いとこから少しづつ学んだ「手話」を用いて、コミュニケーションをとつ

ています。

「指文字」は「手話」とは少し違い、五十音の一音ずつに手の形があり、それを使って表したい言葉を一字一字ずつ表現します。五十音有るので最初は覚えるのが少し大変ですが、覚えてしまえばどんな言葉でも伝えることができる便利なものです。小学校の時に習った指文字が、生活の中で実際に役立ったことに感動しました。指文字や手話を使つて、伝えたい事が相手にうまく伝わると、とてもうれしい気持ちになります。いとことのコミュニケーションが楽しくなりました。

外国人の人と話す時に、その国の言葉を使うように、「手話」は決して特別なものではなく、もう一つの言語なんだと感じました。

すべての人が指文字や手話を覚え、聴覚障害のある人と自由に会話ができるたら、それほど素晴らしいことはありません。ですが、実際は、手話を自由に扱つてコミュニケーションが取れるのは、聴覚障害者の人やその家族に限られているように感じます。

手話はできなくても、私たちにもできることはあります。助けが必要な時には積極的に手助けし、見守るときはそつと見守つていくことです。

また、すべての人が福祉に少しでも興味をもち、「障害」についての理解、関心を深めていくことも大切です。「障害者」ということにしばられずにコミュニケーションをとつていくようにしたいです。

と共に努力し、と共に高め合い、と共に生きる。それは、聴覚障害者だけでなく、他の障害を持つている人、また健常者同士でも変わらないことだと思います。そんなことができる社会になれば、少しでも暮らしやすく、楽しい社会をつくることができるのではないかと、福祉実践教室や生活の中から学ぶことができました。



# ◎秀 逸

私が学んだこと

栄南小学校 六年 山岸 朱璃

私は、今まで視覚障害や聴覚障害のことを知つていいつもりでした。でも、福祉実践教室では、私の知らないことばかりでした。

最初に、視覚障害者ガイドヘルプの体験をしました。ガイドヘルプをすることは、予想よりも、はるかに難しいものでした。小さな段差や溝があつたら、教えてあげないといけなかつたり、階段を上つたり下りたりする際には、相手に合わせてしんちよう歩かなければいけません。さらに、角を曲がるときは、右や左と言うだけでは上手く伝わりませんでした。言葉だけで伝えることの大変さを知りました。また、自分の目にアイマスクをつけて、目が見えない状態を体験しました。目の前が真っ暗で周りに何があるのか全く分かりませんでした。そのため、一人で行動することがとても怖くて、不安でした。友達が道を教えてくれなかつたら、一人では何もすることができなかつます。もし私が視覚障害の方の立場だつたら、学校や通学路は、歩き慣れているから、自分一人でも歩けると思ひます。でも、行つたことのない場所だつたら、誰かの助けを借りなければ、歩いたりすることができな

いと思います。

次に、耳の不自由な方とのコミュニケーション方法を学びました。手話や筆談、指文字など、様々な方法がありました。指文字は、五十音それぞれ指の形がちがつて覚えるのが大変でした。また、濁音や半濁音、促音や拗音によつて手の動かし方がちがうから、とてもむずかしかつたです。私が一番楽しかつたのは、Hさんと、手話でコミュニケーションを取ることができたときです。失敗してしまわいか不安で、きん張しました。でも、Hさんがしつかり教えてくれたので、手話で伝えることができました。声に出さなくとも、心が通じ合えたので、とてもうれしかつたです。最後に教えていただいたのは、手の甲を自分のほうへ向けて、中指と薬指を曲げた形の手話でした。意味は、I LOVE YOU でした。この手話は、世界共通だつたことが、とても良いと思いました。たとえ国や言葉がちがつても、たくさんの人を幸せにできる気がしました。そしてHさんは、私たちのために、一生けん命伝えようとしてくれていました。私は、手話は分からぬけど、Hさんの想いは伝わつてきました。笑顔でやさしく教えてくださいHさんの姿に感動しました。

私は、今回の福祉実践教室で人と人がおたがいに助け合つて生きていることを改めて実感しました。だから今回学んだことを活かしてたくさんの人を助けたいと思います。自分から声をかけることは、少し恥ずか

しいけれど、困っている人がいたら、勇気を出して声をかけようと思います。

また、私は生まれつき弱視で、悩んでいました。眼鏡をつけていないとほとんど見えないので、プールの授業では不安だつたり、眼鏡のレンズが分厚くて、笑われることがあつたりしたからです。

Hさんが笑顔で一生けん命教えてくれたことで変わりました。今回の福祉実践教室を経験することで、私もHさんのように、困難を乗りこえて、前向きに生きていきたいです。

## ◎秀逸

### 車イス体験

日の出小学校 四年 森 智哉

ぼくは、二年生の町たんけんの学習の時に、先生に注意されました。なぜかと言うと、町たんけんで歩きつかれて休みたいなあと思つていたときに、「クラスメイトの子が車イスに乗つているところを見て、「座つていて樂そうでいいな。」と言つてしましました。ぼくは、その時は軽い気持ちでそう言つてしましました。四年生になつて学校で車イスの体験学習の授業がありました。実際に車イスに乗つたり、押したりする体験をしてみると、歩いている時はわからない、でこぼ

こやかたむきに気がついて、思うように進めなかつたり、せまいところも通れなかつたり、段差が登れなかつたり、坂を上がるのが大変でした。車イスに座ると視線が低くなつたので、いつもの風景とちがつて見えました。実際に自分が体験してみると、普段の生活中でも、不自由なことがわかり、ぼくが二年生の時にクラスメイトに言つた言葉を後悔してとても反省しました。

家で車イスの体験学習の話をしていたら、おばあちゃんが「庭で足にけがをしたとき、病院で車イスに乗つたことがあるよ。初めて乗つたからちよつと怖かつたけど、足にけがをしてから、車イスに乗せてもらえて本当に助かつたよ。」と言つっていました。どうして怖かつたかを聞いてみたら、家族に車イスを押してもらつたら、思ったより速く動いて、ブレーキも思つたときにかけてもらえなかつたからと言いました。それを聞いて、自分の思い通りに動いたり止まつたりできなきことは、とても不自由なことだと思いました。もしも、ぼくや、ぼくの家族が車イスを使うようになつたら、家の中はどんなところが不便か考えてみました。玄関に上がる十段ぐらいある階段とか、お風呂やトイレに入る段差とか、二階に上がるための階段は、車イスでは上がれないし、とびらも引き戸ではなくて開き戸なので出入りもしにくいと思いました。家の中だけでも障害になるものをたくさん発見しました。

車イスの人が困っていたら声をかけて助けてあげた  
り、周りの人が手伝つてあげれば、車イスの人も安心  
だし、きけんも少なくなると思いました。これからは、  
お年寄りや体の不自由な人に声をかけたり、車イスを  
押したり、手伝うことはぼくにでもできると思うので  
積極的にやりたいと思いました。

## ○入選

### 誰でもできる福祉という人助け

十四山中学校 三年 真野 りさ子

みなさん、「福祉」と聞いて、何を思い浮かべます  
か。高齢の方々の手伝いや障害のある人の手助けなど、  
「手伝いましょうか。」と言うにも少し勇気が必要と私  
は思います。しかし、ほんの少しの勇気で笑顔は作れ  
る、ということを実際に体験した二つのことから学び  
ました。

私が覚えている中では、はじめて体験した福祉は、  
小学校中学年のときです。その日は地区ごとに行われ  
る消防訓練に参加していました。その日は暑く、しつ  
かり水分補給をしないと倒れそうなくらいでした。同  
じ学校に通っている子は見当たらず、  
「周りの大人と一緒にがんばろう。」  
と思いました。しばらくして、  
「今日は来てくれてありがとう。お茶を飲んで少し休

んでもいいよ。」  
と、近所に住んでいる人にペットボトルのお茶を渡さ  
れました。

「ありがとうございます。」

と言つて受け取りました。近くの木陰で休もうと歩い  
ていたその時、参加していた一人の高齢女性とすれ違  
いました。汗をたくさんかいていて、ふらふらと今にも  
倒れそうでした。

「大丈夫ですか。よければ一緒にあの木陰で休みませ  
んか。」

と、もらつたばかりのお茶を差し出しながら言うと、  
「ああ、ありがとうございます。優しいんだねえ。」  
と笑つてお茶を受け取りました。一緒に休んでいる時  
に、女性はこう話してくれました。

「最近はなかなかあなたみたいな子が参加しなくてね  
え、いざという時は私のような人は何もできないでし  
ょう。こういう場はね、防災も学べるけれど、地域の  
仲を深めることもできるの。だからね、これからも参  
加してね。何かの役にきっと立つから。」

その時から私は、地域のお祭りや行事などに積極的  
に取り組み、なるべく人ととのつながりを大切にしよう  
と思いました。

もう一つは、市内で行われたドッジボール大会に、  
ボランティアとして参加した時の出来事です。それぞ  
れに役割が与えられ、開会式がもう少しで始まるうと

していた時のことです。いきなり小さな青いくつが上から飛んできました。驚いて上を見ると、しまったという顔でこちらを見ている男の子がいました。すぐに私は、

「このくつ、上にいた子が落としちやつたみたいなので届けてきます。」

と、役員の人へ言つて届けに行きました。階段を上がると、男の子は申しわけなさそうに立っていました。

私が近くまで行くと、

「ごめんなさい。」

と、小さな声で言いました。私は目線を合わせるよう

にしゃがんで、

「大丈夫だよ。お姉さんは怒つてないよ。今日はドッジボール、出るのかな。」

安心させようと、やさしい声で言い、くつを返しました。

「うん。今日のためにね、僕いっぱい練習したんだよ。だからね、今日はぜつたい勝ちたいんだ。」

すごく楽しそうな声が返つてきました。すると、男の子のお母さんが近づいて来ました。おなかも大きかつたので、きっと弟か妹ができるのだろうと思い、私は、「じやあ、弟くんか妹ちゃんに大会で勝つたこと、話したいよね。でもね、大会の途中で今みたいにいろいろな物が落ちてくると危ないんだ。これからは気をつけ

けてね。」

そう言うと、こくりと男の子はうなずきました。お母さんに男の子を渡すと、私は、

「何か手伝えることはありませんか。」

と言いました。しかし、

「大丈夫です。くつを拾ってくれてありがとうございます。」

と返つてきました。そして、私は二階から一階を見回る係だつたことを思い出し、

「何か困つたことがあれば、声をかけて下さいね。」

そう言うと、ありがとう。と返つてきました。

「福祉」と聞くと、何だかイメージがわきにくいかかもしれません。しかし、「大丈夫ですか」「手伝いますよ」の一言から誰でも始められる人助けではないかと私は思います。つい言いそびれてしまいそうな一言ですが、ほんの少しの勇気で笑顔が広がるということを忘れないでこれからも生活していきたいです。

## ○人選

生き生きとくらせる社会

十四山東部小学校 六年 伊藤 桃百風

福祉、それは「思いやり」「助け合い」の心をはぐくみ、ともに生きる社会。みんなが手をとり合い、生き生きとくらせることを願うこと。

いじめ、ぎやくたい、家庭内暴力など、子供がぎせ

いになる暗いニュースを新聞、テレビでよく見聞きします。そんな時、心が痛みます。なぜ、人が人をきずつけるのでしょうか。おもいやりの気持ちが足りないと感じます。

私は、児童会の役員を経験しました。そこでふれあい班でのクイズラリーを企画したり、留学生との交流会でゲームをしたりして、みんなの協力があつて、スマートに進めることができました。全学年の交流が学校で多いので、助け合いの気持ちがみんなに芽生え、いじめのない明るい学校になつてていると思います。お盆に親せきのおばさんがみえました。春ごろまで元気だったのに、今はつえをつき、わきをささえられ、足を引きずるようにしてやつと歩けるほどに弱っていました。私はその姿を見て、少しおどろきました。聞いてみると、はじめ腰を痛め、病院に行きましたが、次に足がむくんできました。一度そうなると筋肉はおとろえ、歩くのが困難になります。家の中は、スロープと手すりがつけられました。歩行の補助をする器具や、介護用ベッドもかりています。デイサービスにも、週二回行っています。私の祖母は、おばさんが一人きりの時に、できる限り訪ねて、そばに寄りそい、安心してもらえたらしいなと言つていました。今は私の家に介護の必要な人はいませんが、将来そんなとき、私は何ができるかと考えました。「話し相手」「体をマッサージ」今はそれくらいしか思いつきませんが、普

段のくらしを幸せに、思いやりの心をもつて生き生きとくらしていけたらいいと思いました。

## ○入選

### 相手の立場に立つことの大切さ

弥生小学校 五年 小林 諭都緑

「相手の立場になつて考えなさい。」

と、両親から注意されることが私はよくあります。言つていることは、頭では分かつてゐるつもりだったのですが、ブランドウォークを体験することで、具体的にどうすることが「相手の立場に立つ」ということかを考えるきっかけとなりました。

ブランドウォークでは、案内する役もどう案内していくいか分からず不安でしたし、案内される役も見えない不安がありました。まっすぐの道を歩くのはふだんは何とも思わず歩いていますが、実際に歩いてみると、前が見えない不安から、一歩一歩がすごくゆっくりになり案内してくれる人の手と声だけがたよりでした。

夏休みに出かけた時に駅で白いつえを持つて歩いている方を見かけました。つえを左右にふりながら歩いていました。わたしが思つていたよりも速歩きで正直おどろきました。その時に思つたのは点字ブロックの所に荷物を置いたり、立つたりする人がいて「相

手の立場になつて行動していなかつた」と思いました。その後、電車に乗ると今度は赤ちゃんの絵の付いたキー ホルダーをつけた方が乗つていました。お母さんに

「あのキー ホルダーは何」

と聞くと

「マタニティーマークだよ」

と教えてくれました。そして、私のお兄ちゃんがお母さんのおなかにいた時に高校生の男の子が席をゆずつてくれたことを聞きました。その時に他の人は見て見ぬふりだったのにその子はさつと席をゆずつてくれ、「こんな子に育つてほしいな」と思つたそうです。

数日後、テレビのせん伝で「ヘルプマーク」のことを知りました。お年よりや目の不自由な方、車いすの方は一目で困つていることが分かりますが、見た目に分かりづらいしようがいをかかえていてる方が付けているマークが「ヘルプマーク」です。「相手の立場になつて考える」前に周りを見て行動をしないとどんなことに困つているか気付かず、「相手の立場に立つ」ことができません。点字ブロッサムの上に荷物を置いている人もマタニティーマークのついているキー ホルダーをつけている人が前に立つていてのに席をゆずらない人も気付いてなかつたのかもしれません。周りのこと気に付くためにはまずは、「心と時間によゆうを持つ」ことだと思います。「相手の立場に立つて考える」ために今、私ができることは、時間によゆうを持って行動し「気

付く」ことだとわかりました。「気付く」ことが心のバリアフリーに向けての第一歩になると思います。

## ○入選

思いやりのある未来

白鳥小学校 四年 日比 夏海

わたしはときどき小さい子のお世話をします。今はいとも生まれて、小さい子のお世話をする回数もふえました。お世話をするのはとても楽しいことです。でも、注意をしなければいけないこともたくさんあります。

遊んであげる時にわたしがいつも気をつけていることは、小さい子よりも速く歩かないことです。なぜなら、わたしよりも小さい子の方が歩くスピードがおそいからです。速く歩いてしまうと、小さい子がころんでしまつたり、追いつけなくなつてしまふかもしれません。同じスピードで歩くことを心がけています。もう一つ注意していることがあります。それは、小さい子から目をはなさないということです。目をはなしてしまふと、道路や工事をしていい所に行つてしまふかもしれないからです。道路に行つてしまふと、自動車がたくさん通つていてひかれてしまふかもしれません。それに、工事をしている所に行つてしまふと、マンホールなどの穴に入つてしまい、出られなくなつ

てしまうこともあるかもしれません。なので、小さい子といっしょにいる時は、ぜつたいに目をはなさないようになります。

小さい子のお世話をしていく、わたしは気づいたことがありました。それは、小さい子が遊びたがつて、遊具、おもちゃがある方へ行つて、いっしょに遊んであげると、よろこんでくれるということです。その子が遊びたがつて、遊具の方へ行つて遊んだと、わらつてくれます。小さいからまだ、上手に話すことはできないけれど、その子をよく見ると、指をさしたり自分が行きたい方が分かります。その時、わたしは「人間は子どもでも大人でも、相手のことを見れば、今、何をしたいと思つているのかわかるんだ。子どもも大人も同じなんだ」と感じました。

また、お世話をしていく、「住んでいる所がもつとこうなっていると、安心して生活できるのにな」と思うことがあります。一つ目は、公園です。公園などは自転車も通るから、自転車が通る所、遊具がある所、人が通る所を大きなさくで分けるとよいと思います。そうすると、飛び出したりする心配もなく、子どもも大人も安心して大きな公園に遊びに行けるようになると思います。

二つ目は、信号機です。信号機が青の時間を長くした方がいいと思います。なぜなら、小さい子は青の時間が短いと、歩いてわたりきれない時もあるからです。

三つ目は、横だん歩道です。自転車せん用の横だん歩道のように、ベビーカー用の横だん歩道を作ればよいと思いました。普通の横だん歩道だとデコボコしていく、ベビーカーにのつて、赤ちゃんがびっくりしていました、おしている人もガタガタしておしづらいと思いました。だから、道をきれいに平らにして、ベビーカーせん用の横だん歩道を作ると、小さい子どもがいる家族も安心してわたれると考えました。

わたしは、小さい子と遊ぶことが好きです。いっしょに遊んでいて、その子がわらつてくれるとわたしもうれしくなるからです。これからも、小さい子と遊ぶきかいがあつたら、小さい子のやりたいことをやらせてあげてえがおにさせたいと思います。そして、小さい子どもがいる家族が安心して生活できるようになつてほしいなと思います。

## 【佳作】

### 町をきれいにする活動

十四山中学校 二年 大羽 菜々美

私には弟がいる。その弟が所属している子ども会がある。その子ども会で子どもの親やおばあさん、おじいさんが集まつてゴミ拾い活動が行われた。私はそのゴミ拾いに参加した。その日はとても暑い日で、みん

な汗を流しながらゴミを拾っていた。田んぼの中には、いろんな物が捨てられていた。たとえば、お菓子の入れ物やペットボトル、カン。他にもたくさん種類のゴミがあつた。その中で一番多かったのは、タバコだ。私は拾つても拾つても出てくるタバコに腹を立てていた。隣で拾つていたおばあさんと目があつてこういふ話をした。

「なんでポイ捨てするんでしようね。」

「なんですかね。」

「ポイ捨てしてる人は、何も感じないのかな。」

「感じないんじやない。多分その人達はポイ捨てする

ことが当たり前になっているんだよ。」

そのとき、高校生三人が自転車で通り掛かって一人の

人がポイ捨てをした。私はその人と目が合つた。高校

生は慌てた様子で自転車を止め、ポイ捨てしたゴミを

拾つた。そして、私達に一礼した。私はなんだか嬉しき気持ちになつた。ポイ捨てした事は悲しかつたが、

そのあとの行動が、ほんとうに嬉しかつた。

「こうやつてゴミ拾い活動をしていたことで一人の男

性のポイ捨てをやめさせることができたね。」

とおばあさんが言つた。私は笑顔でおばあさんに、「うん。」

と答えた。おばあさんも笑顔で、参加している人達も

笑顔だつた。私はそこでもまた、嬉しくなつた。

ゴミ拾い活動が終わろうとしているとき、おばあさ

んとこんな話をした。

「あんたがこの活動に参加してくれて良かつた。私がたいな歳になると腰や足がおかしくなつてくるもんですね。」

と笑いながら言つた。

「この活動も参加しようかまよつたんやで。でもあんたが頑張つてる姿みたら私も頑張らうつて思つた。今日は来てくれて、ありがとうね。」

と、言つてくれた。私はとても嬉しかつた。おばあさ

んがなにげなく言つてくれた言葉が心のすみからすみまでを温めてくれた。また、この活動に参加しよう。

今度は今回よりも美しくキレイにしよう。そして、ポイ捨てする人を一人でも減らすことが出来たらいいな

と思つた。

私は今回の活動を通して感じた事が二つある。一つ目は、人の良さだ。ゴミなんてポイ捨てさせとけばいいじやん、とか、ゴミ拾いはやらなきやいけないけどめんどくさいしな、とか、誰かがやつてくれるから私には、僕には関係ない。と考えがちだが、こういった活動に、積極的に参加してくれる優しい心の持ち主さん達は、とてもカッコいいなと思った。私は、めんどくさい、とか、いやだ、とか思つてしまふとき

があるので、きちんと見習つて他人がいやがることも積極的にやつていけたらいいなと感じた。

二つ目は、ポイ捨てしてしまう人の気持ちだ。私は

ずっとポイ捨てしてしまう人の気持ちがよくわからなかつた。でも今回の活動を通してわかつた。ポイ捨てしたときは、悪いことをしていることに気付いていない。だけど、誰かに冷たい目で見られたとき、視線を感じたときに、

「あ、やばいことしたかもしれない。」

と気付くと思つた。もしかしたら、悪いことをしていることに気付いていないのではなくて、心の中で思つていても、表に出せないだけかもしれない。弱いところを隠して強がつているだけなら、誰かの視線で素直になれるのかもしれない。

将来、私達の住む世界がキレイになるように、今から心がけていきたいと思つた。

## 【佳作】

### これから日本のために：

弥富北中学校 一年 荒木 美憂

私は家族と旅行に行つた時に目の不自由な方を見かけた。その方は駅で行う作業や歩くという工程をとても大変そうにしていた。でも私は何もすることができなかつた。その時、小学生の頃に、ブラインドウォークと点字の体験をしたことを思い出した。

ブラインドウォークを体験しようと思った理由は、目の不自由な方だけでなく、隣で誘導する方、両方の

気持ちや難しさが味わえると思つたからだつた。ブラインドウォークという言葉を今まで聞いたことがなかつたので興味がわいたことが理由の一つでもある。点字は、駅やお手洗いなど様々な場所に設置されており、身近なものだと思つていた。また、点字ブロックも近所のスーパーなどに設置してあり、身近にあるものこそ体験してみたいと思つたからだつた。

ブラインドウォークを体験してみると、やはり、目の不自由な方は、私たちが当たり前に歩いていることさえも恐怖なんだと感じた。目の不自由な方を誘導する方は、声だけで危険なところや道案内をしないといけないのでとても難しかつた。でも外に出てみると自分が見えていなくても、太陽の明るさを感じられたり、楽しく会話ができたり、普段私たちが不自由なくしていることもできた。ブラインドウォークは、目の不自由な方と、誘導する方のそれぞれ違つた難しさやその人たちの気持ちがよく分かつた体験だつた。

点字を体験して思った事は「覚えられるのかな。」「覚えるのに何日かかるのかな。」という疑問だつた。一文字一文字少しづつ違うのでとても難しいとも思つた。五十音と数字など種類もたくさんあるので、目の不自由な方はすごいと思つた。でもこんなに大変なものよりもっと簡単なものはないのか、と考えてみると、音響装置付信号機や盲導犬などがあると思つた。しかし、点字は目の不自由な方の一番身近にあるものだととも気

付いた。世の中には、文字で表記されている事が多くの点字は特に大切なものだと感じた。点字ブロックも小さい時は上に乗つて遊んだりしていたけれど、目の不自由な方の気持ちを考えると、遊ぶべきではなかつたと後悔している。目の不自由な方の生活を考えると、何倍も何十倍も大変で不便なこともあると思う。しかし、私は弱音をはいたり、いやな事から逃げてしまうこともある。不自由なく暮らしているだけで幸せなことだと思うし、それを当たり前と思つてはいけない。障がい者の方は、日本だけではなく、世界中に多くいる。障がい者の方のためにできることはまだまだあると思う。私は、目の不自由な方、耳の不自由な方、足の不自由な方々と、その周りの人々を自然に助けられる生き方がしたいと思つた。今の日本には、まだまだ障がい者が生きていく上で様々な問題があると思う。私だけでなく、日本中の人々が助け合い、福祉の輪を広げていかなければならぬとも思つた。少しづつでもその輪が広がつていけば、人助けが日常となり、幸せになる人がどんどん増えていくと思う。助けた人も助けられた人も心が豊かになり、日本中に、幸せの輪が広がる事を願い、これから自分にできることをしていきたいと思つた。

## 【佳作】

### 見守る力と笑顔の福祉体験

白鳥小学校 六年 稲垣 呼音

私の新しい福祉体験の話を二つしたいと思います。一つ目は、寒い冬、老人ホームでおもちつき大会に父と母とお手伝いに行きました。父は力仕事、私と母は、おもちをおいしく頂けるよう、あんこやきなこの下ごしらえをしました。

次におもちです。おもちは、のどにつまる可能性があるので細かくちぎりました。私が思つていたよりもとても小さく親指のつめほどの大きさでした。

用意が整つた頃、車いすで老人の方が来てくれました。好みを聞いてお皿に取り分け、持つていくと、とても喜んでくれました。中には、うれしくて泣いている方もいて、私もとてもうれしかつたです。

途中、のどにつまつている方を見て私はとてもあせりましたが、介護士の方が冷静に対応していました。まだ小さなお手伝いしかできない私には、介護士さんがすぐすてきに見えました。

このお手伝いをして心に残つたことは、ホームの老人の方が泣いて喜んだり、笑顔が見れた事です。二つ目は、梅雨の日曜日、母の友人の誘いで障害者の支援施設での福祉体験です。

施設に入ると数えきれないたくさんの参加者がいて

びっくりしました。この日は、施設では楽しいお祭りです。私は、障害の方をサポートする役割をする事になりました。

「きちんと見て、助けてあげてね。」

と言われ、少し不安もありましたが、

「はい」

と返事をしました。

とても仲良く楽しく出来たと私は思いました。

今回一番大切な事は、「見守る力」だったかと思いました。見守る事は障害を持つ方の生活の力につながると思いました。福祉について発見し学ぶ事が出来た一日になりました。

二つの福祉体験で共通で感じたのは、笑顔で接することだと思いました。みんながニコニコしていると幸せな空気が流れているような気がします。福祉とは、みんなの幸せを共に考え、実現に向けて、実践していくことだそうです。そんな福祉に笑顔というのはぴったりだと思います。

これからもみんなの幸せをお手伝い出来る福祉を経験していきたいと思いました。

そして、福祉に関わり合いのある人達みんなが笑顔でいられるような未来でありますように。

## 【佳作】

福祉ってどういう意味？

桜小学校 四年 浅田 冬真

ぼくは、この夏休みに福祉体験に行きました。なぜなら、お母さんが老人ホームではたらいでいるからです。そこで、福祉ってどういう意味なんだろうと思つたので、インターネットで調べてみました。

福祉の「ふ」は、ふだんのという意味で、福祉の「く」は、くらしという意味で、福祉の「し」は、幸せにという意味で、つなげると「ふだんのくらしを幸せに」ということだと分かりました。それがどういうことなのかと思いながら老人ホームにいきました。

まず最初にやつたのは、あるおじいさんとオセロの勝負です。その人から、「いつしょにオセロをやってくれてありがとう。とても楽しかったよ」と言つてくれて、すごくうれしい気持ちになりました。

その次は、あるおじいさんと話をしました。戦争の話や勉強の話をしてくれましたが、ぼくにはむずかしくて、少したいくつな話で、とちゅうでねむくなつたりしました。話が終わつてからしょく員さんに「お好きな人なんだけど、なかなか話しあうのがなくて、今日は君が話しあうのがたくさん見れたから良かつた」と言つて、たいくつとか思つた自分がいやなやつだなと思いました。

次は、車いすの体験をしました。実さいに車いすに乗つて、運転したけど、大人用だつたので、ぼくには大きくて運転しづらかったです。こここの老人ホームは、リハビリもしているようで「自分でできることは、自分でしてもらう」と聞きました。なので、ぼくたちのようにも使わずに歩いている人もいれば、つえを使つたり、歩きやシルバークー、車いすを使って自分でできる人は、自分で動していました。車いすを使っても、リハビリをしてシルバークーや歩きを使えば、歩けるようになる人もいるそうです。歩けるようになつて家に帰れる人もいるそうで、老人ホームからいなくなるのはさみしいけど、家に帰れることはとてもうれしいことなのだとしょく員さんが言つてしまつた。

最後に一日体験をして、福祉とは「ふだんのくらしを幸せに」という意味が、分かるかなつて思つていました。ぼくにはむずかしくて分かりませんでした。けど、自分でできることは自分でして、ふ通に朝と夕と夕食を食べて、おふろに入つて、ねることができることが幸せなのかなと思いました。



# ～社会福祉法人弥富市社会福祉協議会～

地域での人ととのつながりを大切にし、住み慣れた地域で安心して暮らせる「福祉のまちづくり」を目指して地域福祉活動を推進する団体です。

## ＜事業内容＞

- 弁護士による法律相談、民生委員・人権擁護委員等による心配ごと相談
- 結婚相談、婚活パーティーの企画立案
- 車椅子等貸出事業
- 生活福祉資金や小口資金の貸付
- ボランティアセンター事業（ボランティア活動の相談、ボランティア情報の提供、ボランティア活動保険の加入受付、青少年ボランティア体験学習事業の実施等）
- 各種団体活動の支援協力（福寿会連合会、遺族会、子ども会、身体障害者福祉会、ひまわり会、ボランティア連絡協議会等）
- 80歳以上の方を対象とした「敬老会」の開催
- 結婚50周年を祝う「金婚式」の開催
- 戦没者を偲ぶ「戦没者追悼式」の開催
- 共同募金配分金事業
  - ・ひとり暮らし高齢者対象「ふれあい昼食会」の開催
  - ・障がい児・者対象「機能回復訓練」の開催
  - ・母子・父子家庭対象「社会見学(体験学習)」の開催
  - ・市内学校で「福祉実践教室」の開催
  - ・ボランティア活動育成
  - ・災害ボランティアセンター事業
  - ・歳末たすけあい募金事業「福祉映画会」の開催
- なでしこ指定居宅介護支援事業所の運営（ケアプラン作成等）
- なでしこ指定訪問介護事業所の運営
  - ・訪問介護（高齢者、障がい児者宅にホームヘルパー派遣）
  - ・自費ホームヘルプサービス（介護保険外サービスの提供）
- なでしこ指定障害者相談支援事業所の運営（障がい児・者相談サービス利用計画作成等）
- 生活自立支援センターの運営（生活困窮者自立支援事業）
- 成年後見事業（弁護士による成年後見相談、成年後見普及啓発事業）
- 日常生活自立支援事業（軽度認知症、知的障がい者等の金銭管理）
- 「チャレンジハウス弥富」（就労継続支援B型）経営
- 「地域活動支援センター十四山」経営

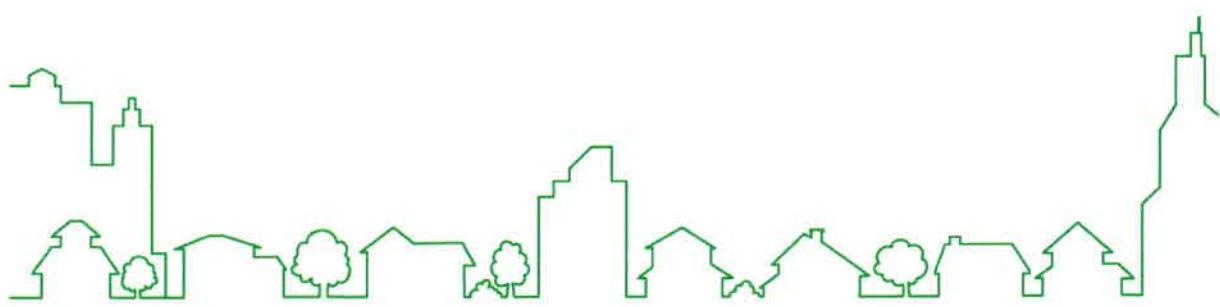
### 弥富市社会福祉協議会基本理念

- “や” やさしさにあふれ
- “と” ともに生き
- “み” みんなでつくる魅力あるまちの
- “ふ” ふだんの
- “く” くらしの
- “し” しあわせ



©しゃらんちゃん

【お問合せ】社会福祉法人弥富市社会福祉協議会 <http://www.shakyo.or.jp/hp/1069/>  
〒 498-0021 愛知県弥富市剣浦町上本田 95 番地 1 E-mail : [yatomi-shakyo@clovernet.ne.jp](mailto:yatomi-shakyo@clovernet.ne.jp)  
社会福祉協議会事務局 Tel0567-65-8105 なでしこ指定訪問介護事業所 Tel0567-65-8106  
弥富市共同募金委員会 Tel0567-65-8105 なでしこ指定居宅介護支援事業所 Tel0567-65-8001  
生活自立支援センター Tel0567-65-8105 なでしこ指定障害者相談支援事業所 Tel0567-65-3724  
FAX (共通) 0567-65-8002  
チャレンジハウス弥富 TEL・FAX0567-65-8008  
〒 490-1413 愛知県弥富市子宝六丁目 80 番地 E-mail : [yatomi-shakyo-j@clovernet.ne.jp](mailto:yatomi-shakyo-j@clovernet.ne.jp)  
地域活動支援センター十四山 Tel0567-52-3425 十四山居宅介護支援事業所 Tel0567-52-3800  
FAX (共通) 0567-52-3811



この冊子の一部は、愛知県社会福祉協議会の『福祉でまちづくり総合推進事業助成金』により作成しております。